

# 解答例-1 漢方

梁哲成

# 略解-1 漢方 -1 四診

1才6ヶ月女児 カウプ指数=15.1 (15.5-17.5) ④⑦

母：反復性扁桃炎⑧

生後8ヶ月より、繰り返す鼻炎。鼻閉、鼻水（透明①⑤→黄緑色）、中耳炎。

咽頭炎、扁桃炎、中耳炎で6回以上発熱/10か月間①②③④⑥⑦

よく泣く。過敏。偏食。④⑦

4日前から透明な鼻水①昨日から一日中黄緑色鼻水①③、夜間の鼻水と鼻閉①

皮膚：全身乾燥と痒み⑦

頸部小麦～小豆大リンパ節多数⑥⑦

舌：白苔少+ 指紋：紅色

咽頭後壁発赤+、咽頭後壁リンパ濾胞発赤多数++、扁桃やや腫大発赤+①②③⑥⑦

両鼓膜：混濁+、軽度発赤+②③⑥

腹：軟④⑦

# 略解例-1 漢方 -2 方証相對・現代医学的診斷

八綱：半表半裏②（表①） 熱③ 虛實中間④

六病位：少陽病⑥（太陽⑤）

氣血水：—

五臟：—

一貫堂：小兒解毒証⑦

現代医学的診斷：反復性鼻炎・咽頭炎・中耳炎

# 略解例-1 漢方 -3 文献-1 鑑別

小児漢方治療の手引き 編集 日本小児東洋医学会

・ ・

## 2. 鼻閉

葛根湯加川芎辛夷 ・ ・ 辛夷清肺湯 ・ ・ 葛根湯 ・ ・ 小青竜湯 ・ ・ 苓甘姜味辛夏仁湯 ・ ・ 麻黄湯 ・ ・ 排膿散及湯 ・ ・ 荊芥連翹湯 ・ ・

柴胡清肝湯 荊芥連翹湯の証で、低年齢児に。アデノイド肥大、扁桃肥大、いびきがある。顔色が浅い。疳が強い。

十味敗毒湯 ・ ・

## 3. 咽頭扁桃炎 ・ ・ ・

小柴胡湯加桔梗石膏 ・ ・ 麻黄附子細辛湯 ・ ・ 荊芥連翹湯 ・ ・

柴胡清肝湯：反復性扁桃炎、慢性扁桃炎、若年層に、アデノイド肥大を伴うときに

## 略解例-1 漢方 -4 文献-2

- ・・・このような小児は虚弱なもので、つねに風邪気味であり、気管支炎、扁桃炎を発病しやすく、肺門リンパ腺肥大と診断される小児が柴胡清肝散証に相当するのである。また、風邪のあとに中耳炎を起こしやすく、アデノイドも起こし易い。以上のような小児はたいてい青白い顔色か、または浅黒い者が多い。そして体型はやせ型で、首が細く、胸が狭い。そのほか、顎下頸部リンパ腺腫大を認める者などは柴胡清肝散の投与を必要とする。（漢方一貫堂医学）
- 此の方は主治の如く、頸部リンパ腺を治すのが本旨であるが、小児の腺病体質に発する癭癧、肺門リンパ腺腫、扁桃腺肥大等、上焦に於ける炎症性充血を清熱、和血、解毒させる能がある。腺病体質は多く父母の遺毒をうけ、肝臓の鬱血を来し食物に好き嫌いがあって、神経質で発育が障害される。本方を続服して体質改善を図る。（漢方後世要方解説）
- ・・・現代医学的には外界からの刺激に反応しやすく、炎症反応が現れやすい体質と考える。つまり慢性の炎症が背景にある可能性がある。（森道伯先生の「一貫堂医学」について）

## 略解例-1 漢方 -5 考察と方剤

考察：上気道～中耳の反復性炎症の小児の半表半裏・熱・虚実中間証の方剤鑑別をする必要がある。慢性反復性炎症の証の鑑別においては、漢方の方証相対ならば、まず一貫堂漢方を検討すべきである。母親の解毒証体質が引き継がれたのであろうか⑧。本症の場合、典型的な小児解毒証体質にあって、太陽病を罹患するとすぐに解毒証が顕在化し、その症候を繰り返している。診察4日前は太陽病に始まり、診察時は解毒証症候に辛夷清肺湯証を兼ねていたため、それを併用したが、症状が落ち着いたところで、潜在している小児解毒証に対する治療をおこなった。

方剤：柴胡清肝湯（対成人標準量の1/5量/1日・分2）（※）

C.Y.

# 略解例-1 漢方 -6 参考文献

漢方処方類方鑑別便覧 藤平健

漢方一貫堂医学 矢数格

森道伯先生の「一貫堂医学について」 日本小児東洋医学会誌2017. vol30

小児漢方治療の手引き 編集 日本小児東洋医学会

cf. 参考原典：明医雑著、外科枢要、保嬰撮要

# 解答例-2 中医学

梁哲成

# 略解-2 中医学 -1 四診

1才6ヶ月女児 カウプ指数=15.1 (15.5-17.5) ④

母：反復性扁桃炎⑥

生後8ヶ月より、繰り返す鼻炎。鼻閉、鼻水（透明①⑤⑦→黄緑色⑭）、中耳炎。

咽頭炎、扁桃炎、中耳炎で6回以上発熱/10か月間②③⑤⑮

よく泣く。過敏。偏食。⑪⑫⑬

4日前から透明な鼻水①⑤⑦昨日から一日中黄緑色鼻水、夜間の鼻水と鼻①③⑤⑦⑭⑮

皮膚：全身乾燥と痒み⑨⑪

頸部小麦～小豆大リンパ節多数⑤⑧⑫⑬

舌：白苔少+ 指紋：紅色

咽頭後壁発赤+、咽頭後壁リンパ濾胞発赤多数++、扁桃やや腫大発赤+①③⑤⑧⑩⑫⑬⑮

両鼓膜：混濁+、軽度発赤+②③⑤⑫⑬

腹：軟④

# 略解-2 中医学 -2 弁証

(現代医学的診斷：反復性鼻炎・咽頭炎・中耳炎)

八綱弁証           ：                           裏② (表①)   熱③   虛④實⑤錯雜

病因・病邪弁証：   外邪                   ： (風寒⑦)、熱⑧

                          ：   內邪                   ：   內風⑨

                          ：   病理產物           ：   熱毒⑩

氣血津液弁証   ：                           陰虛⑪

臟腑弁証        ：                           肝胆三焦鬱熱・熱毒⑫

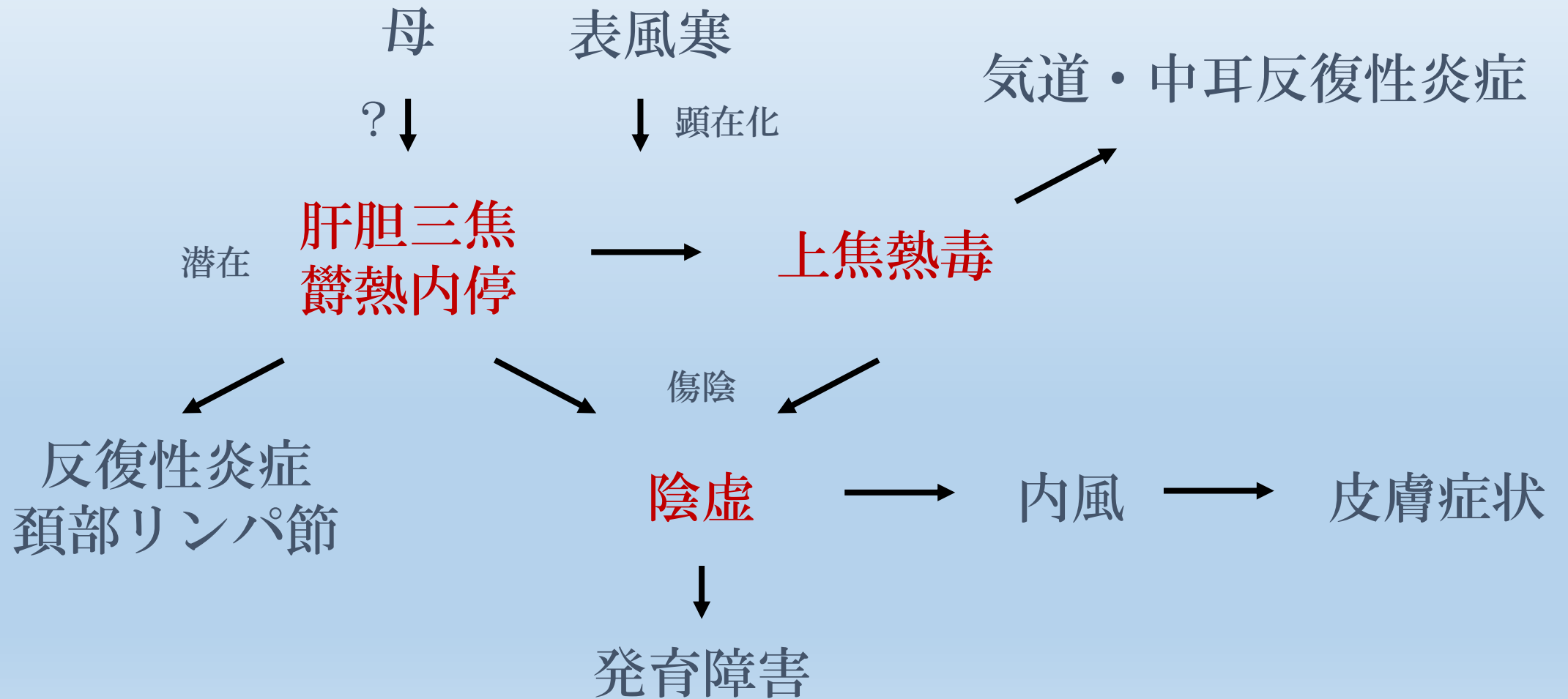
外感熱病弁証   ：   六經弁証           ：   少陽⑬

                          ：   衛氣營血弁証   ：   風溫傷衛⑭

                          ：   三焦弁証           ：   溫毒上壅⑮

証    ：   肝胆三焦鬱熱・上焦溫毒上壅・陰虛

# 略解-2 中医学 -3 病機



## 略解例-2 中医学 -5 文献

- ・・・このような小児は虚弱なもので、つねに風邪気味であり、気管支炎、扁桃炎を発病しやすく、肺門リンパ腺肥大と診断される小児が柴胡清肝散証に相当するのである。また、風邪のあとに中耳炎を起こしやすく、アデノイドも起こし易い。以上のような小児はたいてい青白い顔色か、または浅黒い者が多い。そして体型はやせ型で、首が細く、胸が狭い。そのほか、顎下頸部リンパ腺腫大を認める者などは柴胡清肝散の投与を必要とする。（漢方一貫堂医学）
- 此の方は主治の如く、**頸部リンパ腺**を治すのが本旨であるが、**小児の腺病体質**に発する癰癤、肺門リンパ腺腫、**扁桃腺肥大**等、**上焦に於ける炎症性充血**を**清熱、和血、解毒**させる能がある。腺病体質は多く**父母の遺毒**をうけ、肝臓の鬱血を来し**食物に好き嫌い**があつて、**神経質**で発育が障害される。本方を続服して体質改善を図る。（漢方後世要方解説）
- 柴胡清肝湯<<一貫堂>>・・・主治：**風熱毒邪が肝胆三焦にびまんし、遷延して耗血**をともなった状態。・・・**頭目・体表・咽喉などの熱毒**（皮膚化膿症・中耳炎・咽喉炎・扁桃炎など）などが反復し遷延するときに適用する。（中医臨床のための方剤学）

## 略解例-2 中医学 -4 考察と方剤

考察：母親に内停した熱毒が引き継がれたのであろうか⑥、小児の肝胆三焦にびまん性に熱毒が内停し、過敏な性格をもたらし、発育を傷害して陰分を損傷している。表に風寒を感受する度に、潜在していた熱毒が顕在化し、衛分風熱・上焦熱毒証の病証として症候を繰り返している。内停した鬱熱熱毒を清熱解毒しつつ、疏肝しながら損耗した陰分を補う方剤を選定する。日本で改変された方剤ではあるが構成から本症によく適応する。

方剤：柴胡清肝湯（対成人標準量の1/5量/1日・分2）（※）

## 略解例-2 中医学 -6 参考文献

漢方一貫堂医学 矢数格

中医臨床のための方剤学 神戸中医学研究会編著

cf. 参考原典：明医雑著、外科枢要、保嬰撮要

# 資料

# 参考原典と文献

- 明医雑著（薛注本）「肝胆二経の風熱怒火、頸項腫痛、結核消えず、或いは寒熱往来、痰水を嘔吐する者を治す。・・・」
- 外科枢要「鬢疽及び肝胆三焦の風熱、怒火の症、或いは項胸痛を作し、或いは瘡毒発熱するを治す。」
- 保嬰撮要「肝胆三焦の風熱怒火、乍ち寒に乍ち熱に往来寒熱発熱し、或いは頭に瘡毒を発する等の症を治す」

# 柴胡清肝湯① 古典的解説

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部室長 真柳 誠  
日病薬誌、vol.32、No.1(1996)

・・・

## 4. 処方構成とそのルーツ

ところでこの柴胡清肝湯は森先生の創製ではあるが、何の根拠もなく処方されたわけではない。矢数格先生が示唆されているように、大きくは二方面の背景が考えられる。本方を構成する15種の薬味からまずこれを考えてみよう。

### (1) ルーツその1 ー四物黄連解毒湯ー

本方のオウレン（黄連）、オウゴン（黄{艸+今}）、オウバク（黄柏）、サンシシ（山梔子）の4味は有名な黄連解毒湯で、中国の唐代8世紀の『外台秘要方』に、7世紀の『崔氏方』から引用され、以後使われ続けてきた名方である。

一方、明代1587年に著わされた『万病回春』の傷寒門には、さらにサイコとレンギョウ（連翹）が加わった6味の黄連解毒湯がある。本方にもサイコとレンギョウはあるので、『万病回春』の黄連解毒湯の存在を考えてよいであろう。『万病回春』の条文はつぎのようである。「傷寒ノ大熱止マズ、煩燥、乾嘔、口渴シ、喘満シ、陽厥極メテ深ク、蓄熱内ニ甚シク、オヨビ汗吐下ノ後、寒涼ノ諸薬ソノ熱ヲ退クコト能ワザル者ヲ治す」。

一方、本方のトウキ（当帰）、センキュウ（川{艸+弓}）、シャクヤク（芍薬）、ジオウ（地黄）の4味はすなわち四物湯で、北宋代12世紀初めの『和剂局方』第一版で婦人門に記載され、のち使われ続けてきた名方である。この四物湯も『万病回春』のいくつもの門に同一薬味で記載され、その補益門ではつぎのように記す。

血虚デ発熱シ、或ハ寒熱往来シ、或ハ日晡ニ発熱シ、頭目清セズ、或ハ煩燥シテ寝ネズ、胸隔脹ヲナシ、或ハ脇ニ痛ヲナスヲ治ス。

ところで『万病回春』の血崩門には四物湯に4味の黄連解毒湯を合方し、温清飲と名付けられた処方もある。四物湯が温め、黄連解毒湯が清ますので、温と清を兼ねる意味で温清飲の名ができたと思われる。この温清飲の4味の黄連解毒湯を6味のものとし、つまり温清飲にサイコとレンギョウの加わった10味を一貫堂では区別して四物黄連解毒湯という。

これを解毒証体質に用いる処方の基礎とし、さらにカロコン（{木+舌}楼根）、キキョウ（桔梗）、ゴボウシ（牛蒡子）、ハッカ（薄荷）、カンゾウ（甘草）の5味を加えた処方を、柴胡清肝湯と呼んだ。これら5味が加ええられたのには、別の歴史的背景を説明せねばならない。

## (2) ルーツその2－明代の各種清肝湯－

結論からいうと明代に開発された様々な柴胡清肝湯、ないし類以処方の方意を兼有させるためである。最も古いものは王倫の『明医雑著』に、薛己が1551年に増補した処方にある2種の柴胡清肝散である。一つは、サイコ、オウゴン、オウレン、サンシシ、トウキ、センキュウ、ジオウ、ボタンピ（牡丹皮）、ショウマ（升麻）、カンゾウの10味からなる。これは1615年の『寿世保元』に転載され、それを浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』が再転載している。また甲賀通元の『古今方彙』火証門は薛己から直接引用している。

もう一つの柴胡清肝散は、サイコ、レンギョウ、オウゴン、サンシシ、センキュウ、カンゾウ、キキョウ、ニンジン（人参）の8味である。これは同じ薛己の書で、その没後の1571年に刊行された『外科枢要』の附方にも載り、それを1575年刊行の『医学入門』の外科門と、日本の『古今方彙』癩癰門が引用している。

一方、李梴の『医学入門』外科門には、さらに二種の類以方がある。一つは、清肝湯といい、サイコ、サンシシ、トウキ、センキュウ、シャクヤク、ボタンピの6味からなる。いま一つは梔子清肝湯といい、サイコ、サンシシ、トウキ、センキュウ、シャクヤク、ゴボウシ、カンゾウ、ボタンピ、ブクリョウの9味からなる。さらにもう一種の柴胡清肝湯が、1617年に陳実功が著した『外科正宗』の鬢疽門にある。サイコ、レンギョウ、オウゴン、サンシシ、トウキ、センキュウ、シャクヤク、ジオウ、ゴボウシ、カロコン、カンゾウ、ボウフウの12味からなり、これは清代1742年の『医宗金鑑』に転載されている。

さて以上の各種清肝湯類を記載した明代方書は、すべて江戸時代に復刻されている。それらと和刻本を参考に一貫堂の柴胡清肝湯ができたに違いない。まず以上あげた処方薬味で一貫堂の四物黄連解毒湯にないものを見ると、ゴボウシ、カロコン、キキョウ、カンゾウの4味と、ポタンピ、ボウフウ、ショウマ、ニンジン、ブクリョウの5味である。前の4味が一貫堂の柴胡清肝湯に採用され、後の5味が採用されなかったことになる。5味が不採用の理由は多々あるはずだが、主には解毒証体質には不適當であるからと考えられる。また以上の処方薬味にないハッカが一貫堂の柴胡清肝湯にはあるが、矢数格先生の解説も言及せず、理由は推測の域を出ない。

## 5. まとめ

このように本方は温清飲加柴胡連翹の四物黄連解毒湯および、明代の柴胡清肝湯類の二系統を大きなルーツとして創製された処方である。ただしルーツ処方が8味から12味で、各々薬量も多く作用が強いのに対し、本方は15味で薬量が少なく、おだやかな処方になっている。しかも本方の適応症、つまり解毒証体質幼年期の諸症状はルーツ的文献に一切ない。まさに本方を定めた森道伯先生の創見であろう。

近年の中国で出版されている日本漢方の研究書がみな一貫堂処方を高く評価するのは、こうした理由がある。本日は柴胡清肝湯の古典的側面を解説した。